

怪談 牡丹灯笼

落語の怪談噺で、三遊亭圓朝の作品。元となった物語は、浅井了意の怪奇物語集『御伽婢子』。深川の米問屋に伝わる怪談、牛込の旗本家で聞いた実話などから着想し、幕末の一八六一〜一八六四年頃に創作された。浪人・萩原新三郎と、旗本の娘、お露(幽霊)との悲恋物語。

あれはこの世のものではない



おれがあつて入れません。

どうか剥がして中に入れて下さい。

お露は毎晩家の周りを回りながら、恨めしげに、悲しげに呼びかけてくる。

日ごとやつれてゆく新三郎。寺の和尚は、このままではお露の霊に憑り殺されてしまうと言い、家中の戸に札を貼り、期限の日まで籠もり、夜が空けるまで決して出てはならないと告げる。

ふとしたことから出会った二人。たちまちお互いに惹かれ合う。しかし、お露は新三郎に恋い焦がれるあまり、恋煩いで亡くなってしまった。お付きの女中も看病疲れで亡くなった。その後、幽霊となったお露は夜ごと、女中と共に牡丹灯笼を下げて新三郎の元を訪れ、逢瀬を重ねる。

骸骨と戯れる新三郎



思いを断ち切れず、新三郎は自ら札を剥がした。翌朝、息絶えた新三郎と二体の骸骨が発見されるのだった。

八ツの鐘がゴーンと鳴り響くと、清水の方からカランコロンという音がする。こんな夜更けに女二人の駒下駄の音。女中およねが牡丹灯笼で足下を照らしている。